

グループウェアを利用したイントラネットの構築

川上秀和 (九州農業試験場)

Hidekazu KAWAKAMI : Construction of Intranet with Groupware in KNAES

1. はじめに

九州農試におけるイントラネットは、「インターネットと有機的に結合した内部ネットワーク」²⁾として構築する必要がある。その基盤となるべきシステムを構築したので、概要を報告する。

2. システムの概要

九州農試(西合志地区)のネットワークには、インターネットの他に、Windows95やWindows NT Workstationを利用したワークグループなどがある。これらに対して、今回のシステムでは、Windows NT Server 4.0を搭載したサーバーを導入し、運用形態もワークグループ方式ではなくドメイン方式を採用している。

3. ドメイン方式の利点

ドメイン方式とした第1の理由は、セキュリティの充実を図るためである。「LANでセキュリティを維持する原則は、『そのユーザーが誰かを特定する』ことと『ユーザーごとに利用できるリソースと、その操作を限定する』ということである。Windows NTのドメインというのはまさにそのための機能」⁴⁾なのである。

第2の理由は、ネットワークの規模拡大への対応が容易なことである。ドメイン方式では、設定の変更や追加はサーバー上で行うだけでよく、ネットワーク内の全マシンに変更を加える必要は無い。

第3の理由は、データの集中化、ひいてはグループ作業の効率化が期待できるからである。LAN構築で最も効果があるのは、データの集中化によるデータ再利用の簡便化であり、グループ作業の効率化ははずである。しかし、共有すべきデータを分散させてしまうと、必要時にそのマシンの電源が入っていないとか、最悪の場合にはデータの所在さえ分からないといった実態が発生しかねない。これに対し、サーバー上にデータを集中させれば、これらの弊害を減少させることができる。

4. 留意事項

今回のようにインターネット環境にNTサーバーを追加する場合、メモリーの圧迫や不要なパケット(通信量)の増加を防ぐために、プロトコルは統一した方がよい。また、2種類のドメイン名(識別パネルに設定するNTネットワークドメイン名と、TCP/IPのDNSに設定するインターネットドメイン名)を混同してはならない。

なお、クライアントマシンについても、ログオンユー

ザー以外の不正利用を防ぐために、スクリーンセーバーにパスワード付きロックを掛け、これをスタートアップに登録するなど、その保護に注意を払うべきである。

5. グループウェアの導入

ドメイン方式とした理由の3番目として、ワークグループ方式よりもデータの集中化=グループ作業の効率化が図りやすいということを挙げた。しかし、このためには、データの再利用のしやすさを如何にして図るかという課題が残されている。

つまり、「LANを構築しました、サーバーを設置しました」というだけでは、全ユーザーがよほど自覚的に利用しない限り、似たような(しかも役には立たない)ファイルがサーバー上に溢れてしまう危険性がある。

これを防ぎ、データを管理・分類して手際よく提供するためのツールがグループウェアである。すなわち、グループウェアは、グループでの作業を支援し効率化するためのソフトウェアで、「ネットワークの機能を利用してコミュニケーションと情報の共有化を支援し、作業の生産性を上げるために使われ(中略)、電子メールをはじめ、電子掲示板、グループ・スケジューリング、文書情報の共有データベースなどの機能」³⁾を持っている。

今回は、「インターネット/イントラネット環境と完全に統合し、Webブラウザからでも利用できる環境」¹⁾を備えているノーツ/ノーツドミノを導入している。

6. おわりに

今回構築したシステムをイントラネットとして本格的に運用するためには、停電・バックアップ対策の追加などを含めた管理体制の整備が必要である。また、業務に見合ったアプリケーションの開発も必要である。

引用文献

- 1) 池田 敦: ノーツドミノサーバー構築ガイド, リックテレコム, はしがき, 1997.
- 2) 川上秀和・山下 浩・柴田静香: 九農研 59: 153, 1997.
- 3) 日経 Windows NT 編: Windows NT 用語集, 日経BP社, 60, 1997.
- 4) 竹田津 恩: 若業マークシステム管理者のためのWindows NT 管理ノウハウ, LAN TIMES 3月号, 172, 1997.